

中国語の機能語“给”の反再帰的用法について

Chinese *gei* as a functional marker of dereflexivization

李 孟娟

LI Menjuan

はじめに

“给”に関する研究はこれまで研究者の研究目的や立場により、さまざまな研究成果が出されている。この中に代表的なものとしては朱德熙(1979)や佐々木(1994)が挙げられる。

本稿は“给”構文の中でもっとも複雑な「N1+给+N2+V+N3」構文¹⁾に注目し、このような構文において、「V」が再帰性のある動詞の場合、“给”はどんな役割を果たしているのかについて考察するものである。“给”を伴うことによって、「V」に反再帰化が生じ、動詞の再帰性が失われるというのが本論の主な主張である。

1 先行研究

1.1 盧涛(1993)

盧涛(1993:60-69)は、「N1+给+N2+V+N3」構文において、“给”で導かれた「N2(I0)」を受益者と指摘し、“给”の後にくる「N2(I0)」の受益者の性格(この受益者の性格は文法的性格と意味的性格両方が含まれる)を六つに分類する。その中で本稿と関わるのは次のような構文である。

間接目的語 N2 が部分被動体としての受益者。(本来、N3 が N2 の一部の場合)

(1)张三给李四洗头。

張三は李四に頭を洗ってあげる。

筆者が注目するのは(1)の张三给李四洗头。(張三は李四に頭を洗ってあげる。)のような構文である。盧涛(1993:67)は、「『头』が李四の『头』で、張三が洗ったら、自然と『李四』へのサービスになる」と述べるものの、“给”の役割に関しては、ただ「“给”は李四が受益者の立場にあることを示す。」とのみ言及する。

1.2 袁明軍 (1997)

袁明軍 (1997:138-150)は「N1+给+N2+V+N3」構文に関しては、“给”の文法上の意味特徴

を7種類に細かく分類している。その中で本稿と関わりのあるのは下のような構文である。

“ 给 ” 引进动作的受益对象。(“ 给 ” は動作の受益対象を提示する。 ²⁾)

(2) 他给我脸上搽了许多粉。

彼は私の顔にパウダーをたくさんつけてくれた。

袁明軍 (1997:138-150) は“ 给 ” の役割に関しては、「N2(I0)」を提示するということのみ指摘する。

盧涛(1993)や袁明軍 (1997)は(1)と(2)のような構文が受益構文であると主張する。筆者は間接目的語である“ 李四 ” や“ 我脸上(私の顔) ” は「受益者」或いは「受益対象」と見なすより、授与目標と理解したほうが妥当だと考える。なぜなら、「给+N2」を省略すると文全体の意味が変わるからである。(1)は“ 张三洗头。(張三は自分の頭を洗う) ”、そして(2)は“ 他搽了许多粉。(彼は自分の顔にパウダーをたくさんつけた) ” という意味になってしまう。このように、「给+N2」は文の必要不可欠な部分であり、省略してはいけないことが窺える。このことから、(1)と(2)のような構文は受益構文ではないと判断する。では、受益構文はどのような特徴があるのだろうか。これについては次の論考に譲る。

本稿は「N1+给+N2+V+N3」の構文において、「V」が再帰性のある動詞の場合、“ 给 ” が「N2(I0)」を提示するのみならず、後にくる動詞の再帰性にも影響するということを明らかにする。

2 動詞の再帰性について

2.1 再帰動詞

『日本語百科大事典』によると、「他動詞の中には、『着る』『履く』『あびる』のように、動作の結果、動作の主体に変化の生じるものがあるが、これを『再帰動詞』と呼ぶことがある」としている。

工藤(1995:69-80)は再帰動詞と自動詞に近いということを使役・他動・自動との関わりの中で説明している。使役・他動は参加者が2項以上の主体から、客体へと働きかける外的運動であり、自動・再帰は、参加者が1項の、働きかけ性のない内部運動であると指摘している。

一方、仁田(1982:119-133)が初めて再帰動詞と他動詞の再帰的用法を分けて提示した。再帰というのは「働きかけが動作主に戻ってくることによって、その動作が終結を見るといった現象」である。そして、「再帰的な用法しか持たない動詞」を再帰動詞と称している。

例えば、「着る、はく、脱ぐ」のような衣服などの着脱を表す動詞を再帰動詞の代表と述べる。また、「典型的な他動詞がその一用法として再帰的に使われる場合」を再帰用法と呼ぶ。例えば、「手ヲ叩ク」、「舌ヲカム」といった使用の中で、「叩ク」や「カム」が再帰性といった意味的なあり方を帯びることになり、再帰用法をもつことはあるが、再帰動詞ではない。

2.2 再帰用法のある他動詞

再帰用法の動詞については、仁田(1982:130)は「典型的な他動詞がその一用法として再帰的に使われる場合」を再帰用法と呼ぶ。また、再帰用法の動詞を含む構文を「再帰構文」と称する。

仁田(1982)によると、再帰構文の特色は、ヲ格成分が動作主に現に付随している動作主の分離不可能な一部を表す名詞類によって形成されている。この再帰用法のヲ格名詞は「身体部位」といった意味特徴を帯びたものであるとされる。[例えば(子供八手ヲ叩イテ喜ンダ。)(アワテテ御飯ヲ食ベタノデ、舌ヲカンデシマッタ。)]などがそれにあたる]

事実、中国語にもこのような再帰構文が存在する。次の例を見られたい。

(3)妈妈焐被窝。

母は布団を温める。

(4)妈妈焐腿。

ママは足を温める。

上記の例文(3)は日本語のヲ格成分に相当するものは“被窝(布団)”である。母が温めることによって、布団は暖かくなる。一方、(4)はヲ格成分に相当するものは人間の身体部位を表す“腿(足)”である。しかも、ここの「足」は「母の足」としてしか理解できない。つまり、中国語の“焐”は典型的な他動詞の用法[(3)のような用法]と再帰用法[(4)のような用法]と両方とも持っていると言えよう。このように、“焐”は仁田(1982)の指摘した再帰用法の動詞にあたる。

3 “给”の反再帰的用法

本節では、「N1+给+N2+V+N3」構文における“给”の反再帰的用法について分析してみる。では、このような構文の中で「V」が再帰性のある動詞の場合、“给”はどのような役割を果たしているのだろうか。

3.1 一般的な他動詞の場合

では、次の例を見てみよう。

(5)妈妈焐腿。 [= (4)]

ママは自分の足を温める。

(6)回家以后两条腿冻得象冰。妈妈用自己的温暖的手掌给他焐腿。『活动变人形』

家に帰ると二本の足は氷のやうに冷えきっていた。ママは自分のあったかい手で彼の足を温めてくれた。

(5)は(4)と同様であるが、(6)はコーパスから引き出した原文である。この二つの例文を比較すると分かるように、(6)は“给他”を加えるものと見られる。(5)の“焐”は再帰性が生じるため、文中の“腿(足)”が自然に“妈妈的腿(母の足)”と認識される。それに対して、(6)は“给他”が現れるため、“腿(足)”が主語の「母の足」ではなく、間接目的語である「他(彼)」の身体部位と理解される。このことから、“焐”の再帰性が失われることがわかる。

また“焐”の他に、“捶”“垫”“套”“擦”“拭”のような動詞も同様な振る舞いが見られる³⁾。

3.2 着脱類の動詞

すでに 3.1 で取り扱った再帰用法のある動詞はすべてヲ格に相当する部分が身体部位を表す名詞であるが、この節ではヲ格名詞は身体部位ではなくても再帰性のある「着る」や「脱ぐ」のような意味を表す着脱類の動詞を取り上げ、分析を行う。

(7a)那时候，妈妈爱穿一身红，红得象团火。

あのことろ、お母さんは上から下まで赤いものを着たがった。まるで火の玉みたいに。

(7b)那时候，妈妈爱给我穿一身红，红得象团火。『人啊，人』

あのことろ、お母さんは私に上から下まで赤いものを着せたがった。まるで火の玉みたいに。

上の例文の(7b)はコーパスから引き出した例文で、(7a)は筆者による作例である。日本語のヲ格成分にあたるものは「赤いもの」であり、身体部位ではないことが明らかである。しかし、(7a)は上から下まで赤いものを着たがったのはほかの誰でもなく、主語である“妈妈(母)”のほうであるため、(7a)は動詞“穿”という動作が行われた結果、動作の主体に変化が生じることになり、“穿”の再帰性が認められる。

しかし、例文の(7b)は(7a)と異なる。(7b)は主語の“妈妈(母)”が“我(私)”に“穿(着る)”という動作行為をやってくれて、結果的には洋服が主語の“妈妈(母)”の方に帰さず、間接目的語の“我(私)”の体に着ていることとなる。また、次の“脱”も同じように考え

られる。

(8a) “你没看见小妹病了吗？”陆文婷瞪了园园一眼，忙脱了衣服，把她放在床上，替她盖上被子。

「妹が病気だってことぐらい気が付かないの？」陸文婷は園園をちょっとにらんでから、すばやく着物を脱いで、ベッドに寝かせてフトンをかけてやった。

(8b) “你没看见小妹病了吗？”陆文婷瞪了园园一眼，忙给佳佳脱了衣服，把她放在床上，替她盖上被子。『人到中年』

「妹が病気だってことぐらい気が付かないの？」陸文婷は園園をちょっとにらんでから、すばやく佳佳の着物を脱がせ、ベッドに寝かせてフトンをかけてやった。

(8a)は洋服を脱いだのは主語の“陆文婷”であり、動詞“脱”の再帰性が生じている。一方、(8b)は“给佳佳”が加わるため、“脱(脱ぐ)”という動作は再帰性が奪われ、日本語で訳すると「脱がせる」となる。

“穿”“脱”の他に“带”“别”“束”“换”“蒙”“罩”という動詞を考察した結果、着脱の動詞と同様な用法があると分かる⁴⁾。

上記の分析からも分かるように、ヲ格名詞が身体部位ではない「着脱類」の動詞でも、再帰性を有するが、“给+N2”が加わると、動詞の再帰性がなくなってしまう⁵⁾。

4 おわりに

本稿は「N1+给+N2+V+N3」構文において、「V」が再帰性のある動詞の場合、“给”がどんな役割を果たしているかについて考察を試みた。

「V」が再帰性のある動詞の場合、“给+N2”が現れることにより、「V」の再帰性が失われるということが明らかになった。このことから、“给”が受領者「N2」を明確化するのみならず、「V」の再帰性にも影響を及ぼすと主張した。

注：

1) 「N1+给+N2+V+N3」構文は「N1」は文の主語を表し、「N2」は“给”の間接目的語(I0)を表し、そして「N3」は“给”の直接目的語(D0)を表すことを意味する。

2) 日本語は筆者が翻訳したものである。

3) “捶”“垫”“套”“擦”“拭”のような動詞の具体例は次のようである。(b)はコーパスから引き出した原文であり、(a)は(b)から「给+N2」を取り去ったものである。

(1a) 陈姨太带着一股脂粉香，扭扭捏捏地从隔壁房里跑过来，站在旁边捶背。

陳姨太があわてて隣の部屋から駈け出して来て、立ったまま自分の背中をたたいた。

(1b) 陈姨太带着一股脂粉香，扭扭捏捏地从隔壁房里跑过来，站在旁边给祖父捶背。『家』

陳姨太があわてて隣の部屋から駈け出して来て、立ったまま祖父の背中をたいた。

(2a) 紫茄子扯过枕头垫在脑袋下边，又从墙上摘下一件小棉大衣，给儿子盖上。

「青ナス」は枕を引っぱって自分の頭の下にあて、壁にかかっていた綿入れのオーバーを取って子供にかけた。

(2b) 紫茄子扯过枕头给儿子垫在脑袋下边，又从墙上摘下一件小棉大衣，给儿子盖上。『金光大道』

「青ナス」は枕を引っぱって子どもの頭の下にあて、壁にかかっていた綿入れのオーバーを取って子供にかけた。

(3a) 他刚要摸，钱彩凤已经蹲下身，扒掉了他脚上的两只旧鞋，挺麻利地把两只黑斜纹布面、千层底的新鞋套在脚上了。

それに手をやろうとしたら、錢彩鳳はもう足元にしゃがんで、はき古した両方の靴をさっさと脱がせ、おろしたての黒地の布靴をはいた。

(3b) 他刚要摸，钱彩凤已经蹲下身，扒掉了他脚上的两只旧鞋，挺麻利地把两只黑斜纹布面、千层底的新鞋给他套在脚上了。『金光大道』

それに手をやろうとしたら、錢彩鳳はもう足元にしゃがんで、はき古した両方の靴をさっさと脱がせ、おろしたての黒地の布靴をはかせていた。

(4a) “急什么，我不是在这儿吗！”他掏出手绢，弯腰擦着眼睛。

「何を心配するんだ、ちゃんところにいるじゃないか」彼はハンカチを出し、腰をかがめて自分の涙をふいた。

(4b) “急什么，我不是在这儿吗！”他掏出手绢，弯腰给小竹擦着眼睛。『钟鼓楼』

「何を心配するんだ、ちゃんところにいるじゃないか」彼はハンカチを出し、腰をかがめて息子の涙をふいてやった。

(5a) 我不知他还骂了些什么，我也不知自己是怎么醒过来的，我只见他还站在我的面前，我胃里一翻，一下子吐了出来。他见我这样，忙又掏出手帕拭嘴。

彼が何をまだ怒鳴っているのかも、自分でどのように気が付いたのかも分らなかったが、まだ彼が私の前にいるのを見ると、胃がムカッとしたとたんに私はいきなり吐いた。それをみた彼は慌ててハンケチを出し、自分の口をふこうとした。

(5b) 我不知他还骂了些什么，我也不知自己是怎么醒过来的，我只见他还站在我的面前，我胃里一翻，一下子吐了出来。他见我这样，忙又掏出手帕，给我拭嘴。『天云山传奇』

彼が何をまだ怒鳴っているのかも、自分でどのように気が付いたのかも分らなかったが、まだ彼が私の前にいるのを見ると、胃がムカッとしたとたんに私はいきなり吐いた。それをみた彼は慌

ててハンケチを出し、私の口をふこうとした。

日本語のヲ格成分に相当するものは(1a)は“背(背中)”であり、(2a)は“脑袋(頭)”であり、(3a)は“脚(足)”であり、(4a)は“眼睛(目)”であり、そして(5a)は“嘴(口)”である。これらはすべて主語の分離不可能な一部と思われる。しかし、「给+N2」が加わると、これらの身体語彙はすべて「N2」の身体部位となるため、動詞の再帰性がなくなることが分かる。

4) “带”“别”“束”“换”“蒙”“罩”という動詞の具体例は次のようである。(b)はコーパスから引き出した原文であり、(a)は(b)から「给+N2」を取り去ったものである。

(1a) 不管母亲的悲哭，他昂然地立在地上。宪兵带上了沉重的手铐。

母親の悲しみをよそに、かれは昂然と床に立ちはだかった。憲兵は自分で自分に重い手錠をかけた。

(1b) 不管母亲的悲哭，他昂然地立在地上，由宪兵给他带上了沉重的手铐。『青春之歌』

母親の悲しみをよそに、かれは昂然と床に立ちはだかって、憲兵から重い手錠をかけられた。

(2a) “姐姐，俺们别上吧，俊着哩。”几只小手轻轻把一朵朵小花插在我的发辫上。

「おねえちゃん、私たち自分の髪に飾ってもいい？とても綺麗。」小さな手がいくつか、私のおさげにそっと花を差しこんだ。

(2b) “姐姐，俺们给你别上吧，俊着哩。”几只小手轻轻把一朵朵小花插在我的发辫上。『轮椅上的梦』

「おねえちゃんの髪に飾ってあげる」小さな手がいくつか、私のおさげにそっと花を差しこんだ。

(3a) 护士过来束好腰带后，忽然端详着她问道。

看護婦が後ろに寄り添って自分の腰に帯を結びながら、つと彼女の顔を覗き込むようにしながら言った。

(3b) 护士过来给她束好腰带后，忽然端详着她问道：『人到中年』

看護婦が後ろに寄り添って帯を結んでくれながら、つと彼女の顔を覗き込むようにしながら言った。

(4a) 婶婶正在怀孕。她艰难地走到尸首前，当众换上了一身干净衣服。

叔母は身ごもっていた。苦勞して遺体の前に行き、衆人の前できれいな衣服に着換えた。

(4b) 婶婶正在怀孕。她艰难地走到尸首前，当众给叔叔换上了一身干净衣服。『人啊，人』

叔母は身ごもっていた。苦勞して遺体の前に行き、衆人の前で叔父をきれいな衣服に着換えさせた。

(5a) 小护士一边抿嘴儿笑着，一边蒙上有孔巾，一边嘱咐说。

看護婦らは唇に手をあてて笑いこけながらも、穴のあいた白布を自分の顔にかけながら、宥めるように言った。

(5b) 小护士一边抿嘴儿笑着，一边给这兴奋得直要坐起来的病人蒙上有孔巾，一边嘱咐说。『人到中年』

看護婦らは唇に手をあてて笑いこけながらも、興奮の余りベッドの上に起き上がるようにする病人に、穴のあいた白布を顔にかけてやりながら、宥めるように言った。

(6a) 护士罩上有孔巾。

看護婦は穴のあいた白衣を自分の体にかけた。

(6b) 护士给小病人罩上有孔巾。『人到中年』

看護婦は小さな患者に穴のあいた白衣をかけてやった。

具体的に例文に照らしてみると、(1a)は動作を行った後、主語の“宪兵「憲兵」”が「自分に重い手錠をかけた」という意味になる。“给他”があると、「重い手錠をかけた」のは“他(彼)”の方に変わる。

(2)も、“给你「おねえちゃんに」”が省略すると、(2a)となり、状態変化のは主語の“俺们”「私たち」となる。(3)も“给她”が加わることによって、「腰に帯を結んだ」のは主語の“护士(看護婦)”から間接目的語の“她(彼女)”に変わる。(4)動作の“换”を行った結果、(4a)は「きれいな衣服に着換えた」のは主語の“婶婶(叔母)”であるのに対し、(4b)は“叔叔(叔父)”の方であるということが分かる。(5a)も(6a)も動作を行った結果、変化したのは主語の“护士(看護婦)”であるが、“给+N2”が加わって、(5b)と(6b)となり、変化したのはすべて間接目的語の“病人(患者)”である。

5) なお、「N2」が“自己”となる場合は、“给+N2”が文に加わると、動詞の再帰性を依然として保つ。

参考文献

- 金田一 春彦・林 大・柴田 武編 (1995) 『日本語百科大事典』 大修館書店 174
- 工藤 真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト-現代日本語の時間の表現-』 ひつじ書房 69-80
- 佐々木 勲人(1994)「中国語の受益文」『筑波大学言語文化論集』38号
- 仁田 義雄(1982)「再帰動詞，再帰用法 Lexico-Syntax の姿勢から」『日本語教育』47号(仁田義雄 著 2010: 119-133 『語彙論的統語論の観点から』に再録)
- 仁田 義雄(1988)「拡大語彙論的統語論」久野暉・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』くろしお出版 45-77
- 盧 涛 (1993)『「给」の機能語化について』『中国語学』NO.240 60-69
- 袁 明軍 (1997)「与“给”字句相关的句法语义问题」『語言研究論叢』第7輯語文出版社 [馬慶株(主編)邱廣君(副主編)2007: 138-150『汉语动词和动词性结构・二編』に再録]
- 朱 德熙 (1979)「与动词“给”相关的句法问题」『方言』第2期 1-3